

緑の地球

GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力



奇観が楽しめる蔚県の飛狐峪は、重要な交易路として使われていた歴史がある。

Contents

- 緑の地球ネットワーク第23回総会の報告 P 2
- GEN総会記念シンポジウム要旨..... P 4～6
- 大同緑化協力25年の軌跡 P 7
- 会員からのメッセージ P 6

2017.7
176

認定特定非営利活動法人 緑の地球ネットワーク

緑の地球ネットワーク 第23回総会の報告

6月17日、大阪産業創造館5階研修室にて緑の地球ネットワーク第23回総会が開催されました。総会に先立ち、記念講演がおこなわれました（講演要旨はP4～P6に掲載）。

会員421名（団体含む）のうち、出席数37名、書面またはメールによる決議への参加163名、委任状提出56名、合計256名で総会が成立しました。

【議事】

2016年度事業報告・決算報告・監査報告とその承認、2017年度事業計画と予算の提案とその承認、役員改選の提

案とその承認がおこなわれました。新役員については以下のとおりです。

【第19期役員】

○代表 前中久行

○副代表 川島和義／高見邦雄

○事務局長 東川貴子

○会計 川島和義（副代表と兼任）

○世話人 上田信／浦崎賢太郎／太田房子／大原一晃／河本公子／小西美保子／鈴木充／鶴田惇／長坂健司／藤沼潤一／町田良太／松島清／松永光平／宮崎いずみ／宮本敏幸／向井美香／村松弘一

○監査 池場道明／早草晋

○顧問 石原忠一／小川眞／桜井尚武／藤原國雄／干場革治

なお、遠田宏さんが顧問を退任し、巽良生さん、永島智子さん、藤原國雄さん、干場革治さんが世話人を退任しました。

【懇親会】

総会終了後、食事とお酒を交えた懇親会をおこない、34名が参加しました。



ご利用ください。発送作業の都合上、一律に同封しますが、最近ご協力いただいた方には重ねてのお願いではありません。

銀行振込でご送金いただく場合は、電話、メール、ファックスなどでお名前、連絡先、寄付金の用途をGEN事務所にお知らせください。

【銀行口座】

三菱東京UFJ銀行 阪急梅田北支店
普通 5284852 緑の地球ネットワーク
どうぞよろしくお願いいたします。

夏季カンパのお願い

GENの活動継続のため、みなさまのご協力をお願いします

北九州の水害には言葉がありません。被害にあわれた方にはお見舞いを申し上げ、少しでも早い復旧をお祈りいたします。ボランティアには行けないので、気持ちばかりの寄付で現地を応援します。

同じようにお考えの方も多いと思うので恐縮ですが、GENもボーナスカン

パキャンペーンのシーズンです。事務所を引っ越して少し身軽になったとはいえ、昨年度は赤字になるなどまだまだ厳しいGENの運営に、また、新しい緑化協力地静岡県や、東北の海岸林再生協力事業に、ぜひみなさまのご協力をお願いいたします。

ご送金には同封の郵便振替の用紙を

スイカズラの花の甘い蜜を吸ったりしながら歩きました。

錦織公園の南入口より入ってタンポポにそっくりな黄色い花はブタナという名前だと前中先生に教えていただきました。よく見るとタンポポと違って枝分かれしており、葉っぱを触ってみるとブタさんの肌のように気持ちよかったです。

午前中は堂の山古墳、梅の里を見て歩き、鉄琴のように音が奏でられるドレミの小橋、桜木の里と進みました。そして河内の里に植えてある野菜畑をみたりしながら里の家でお昼休憩。水車があったりと、のどかな風景に心癒されます。

午後はつつじの丘を越えてハイキング道を歩きました。途中、吊り橋を渡りましたが、たいして揺れないのでスリリングさはなく、吊り橋効果は期待できず。しゃくなげの谷を抜けて最後は展望台に上り、景色を堪能することができました。（河本）



初夏の錦織公園を 歩いてきました

5月27日、GEN自然と親しむ会「前中代表と歩く野の道」シリーズ②錦織公園をあるくがおこなわれ、10名が参加しました。

「野の道」シリーズの第2弾は富田林市にある錦織公園でおこないました。

お墨付きの晴れ男である前中先生のおかげで晴天に恵まれ、南海電鉄高野線の滝谷駅に10時に集合し、歩いて公園へ向かいました。元気で好奇心旺盛な参加者のみなさんと一緒に、途中で



報告 里山の恵みに元気をもらう

藤田 修二（GEN会員）

6月24日、GEN自然と親しむ会「前中代表と歩く野の道シリーズ③あいな里山公園を歩く」がおこなわれました。梅雨の季節でしたが晴天に恵まれ、14名が参加しました。

GEN自然と親しむ会が6月24日、神戸市北区山田町の国営明石海峡公園神戸地区の「あいな里山公園」で開かれ、講師の前中代表はじめ、川島・高見両副代表、東川事務局長ら14人が参加した。

梅雨のさ中だったが、晴れ男の前中代表には関係ないらしく太陽が降り注ぐ暑い日となった。あいな里山公園は、まだ整備中の新しい公園だが、訪れたのはこのうちの「棚田ゾーン」。藍那地区の里山とその暮らしを見てもらい、農業体験もするというところだ。

神戸電鉄藍那駅からの同公園への道々、ササユリ、ショウブ、ミゾソバなど季節の植物に見入り、公園入口で

は巢立ち間近のツバメの五つ子ちゃんにも見とれ、移築された茅葺の立派な古民家に目を見張った。そのうちの旧庄屋の家は移築だけで1億円もかかったそうだ。昔から同地区で続いている農村歌舞伎の舞台を備えた家もあった。

家の中で柿の葉茶のバック詰め体験、畑でジャガイモ掘り体験もした。もっともジャガイモは掘ってもらったのを拾ったというのが正直なところ。

この日、前中先生から教えていただいた植物は、園内でもクマノミズギ、ホタルブクロ、

ハナイカダなど私のメモ帳に書いただけで30種を超えた。山に響くウグイス、ホトトギスなどの鳴き声にも元気をもらった1日だった。



報告 バイオ炭で豊かな森を 宇久須合宿

藤原 國雄（GEN会員）

5月12日～14日の日程で、GEN関東ランチ宇久須合宿をおこないました。2010年からスタートし、今回で15回目の開催になりました。

GEN関東ランチが西伊豆町宇久須で「宇久須合宿」を年に2回はじめて8年目になります。合宿の内容は経年とともに変化しました。無煙炭化器によるバイオ炭の作成、休耕田を切り開いてヤーコンの栽培、黄金崎の松・再生プロジェクトそして現在取り組んでいるのが「芝山緑化プロジェクト」。伊豆珪石の露天掘りの鉱山跡地の緑化です。共通する内容はバイオ炭の利用です。

火山の熱水によって、熱変成の結果できた伊豆珪石。珪石はほぼ掘り尽くしましたが、問題は土地の返却です。鉱山の土地の多くは宇久須財産区の土地で、法律では「採掘跡地は、他用途に活用する計画がある場合を除き、原則として順次緑化すること」と定められています。採掘前と同じ状況に戻さなければなりません。億単位のお金をかけたみたいですが、問題は鹿による食害です。下田農林事務所と相談し、

緑化樹にヤシャブシを選んだそうです。ヤシャブシは放線菌と共生するために、先駆植物としてはよく使われる木です。鹿も大好きみたいで、食べ尽くされています。

関東ランチが宿舎を借りている関係で東海工業から黄土高原で緑化に成功したGENに緑化に関して相談がありました。ここでもバイオ炭が活躍します。

珪石と交互にあったpH2～3の青粘土もバイオ炭で中和が可能であることが分かりました。問題は鹿の害です。そこで緑化に使う樹種の選定です。30年以上この地に住んでいる私の勘から、アセビ、シキミとイブセンリョウを選びました。いずれの植物も鹿の食害を受けませんが、イブセンリョウは樹林下に生育する陰生植物のため、直射日光の

下での生育が問題です。

一昨年にアセビとシキミを挿し木しました。アセビは秋には発根しましたが、定植した苗の活着率が芳しくありませんでした。山取の実生のシキミは活着やその後の生育も順調だと思います。

ところがシキミの挿し木はカルスが形成されましたが、根に分化してくれません。そこでVA菌根菌がカイネチンの分泌に関係することが分かり、シキミの挿し床に田方農業高校が作成したVA菌根菌を混ぜて約1000本挿し木しました。結果が楽しみです。定植は2年後となりそうです。



2015年に植えたアセビの苗。元気に育ってほしい



GEN 総会記念講演抄録

イューシエン

蔚県今昔～緑化の展望を拓く～

上田信さん（GEN 世話人 立教大学教授）

第 23 回総会に先立っておこなわれた記念講演「蔚県今昔～緑化の展望を拓く～」は、4 月に張家口市蔚県を訪問した上田信さんに歴史的な視点から見た現地についてお話いただきました。38 名が参加しました。（文責＝編集部）



1992 年の準備段階から緑の地球ネットワーク（GEN）の活動にかかわり、95 年夏のワーキングツアーに参加し、その後何回も大同に行き、ときには一人で農村に残って調査したりしてきました。今日は GEN が新たに協力事業を始める蔚県についてお話しします。

蔚県は張家口市南部に位置し、北京の真西にあたります。工事中の高速道路が開通すると、北京からアクセスしやすくなるでしょう。張家口市の西隣がこれまで協力してきた大同です。今までの経験を生かしますし、大同での成果を生かすこともできるでしょう。

たとえば靈丘県の南天門自然植物園は、もともとそこにあった樹木、植物を中心にして森林を再生させたわけですが、蔚県から南天門までは近いので、目指すべき緑化の到達点がどこにあるかを目に見えるかたちで示せると思います。北京からアクセスしやすく、大同に文化的にも近いことで、大きな可能性を感じるわけです。

◆異なる文化の交差点

蔚県には蔚州博物館という県レベルには珍しいりっぱな施設があり、展示も非常に充実しています。県内に旧石器時代の遺跡もありますが、新石器時代には 3 つの文化の交差点になって

いました。仰韶文化は黄河の中流域で栄えた彩陶を特色とする文化です。竜山文化は黄河中流域から下流域で栄え、黒陶が特色でした。もう 1 つの紅山文化は河北省北部から内蒙古の草原につながる文化です。この 3 つが蔚県盆地で交差し、南の農耕を中心とする文化と遊牧系の北方の文化が混じり合っているわけです。このことが蔚県の歴史と現状をとらえるうえで重要だと思えます。

春秋時代、ここには代国がありました。『史記』の中に趙世家という趙の国の歴史を書いたものがあります。趙は大同など山西省の北部を拠点とした春秋戦国時代の強国ですが、その趙が大国に成長するときに代が登場します。趙王の簡子が、世継ぎを決めるために子供たちの才能を見極めようと、「宝の札を常山（現在の恒山）のうえに隠しておいた。先に見つけたものに褒美をやろう」と。子供たちは常山に駆け上ったが、何も得られなかった。毋卹が「札を見つけました」と述べ、「常山から代の国を見下ろしました。この代国を取るべきです」。毋卹は末子のうえに、正室の子供ではなかったが、簡子は長男の太子を廃し、世継ぎを彼に決めました。

簡子亡きあと、毋卹が即位して襄子と名を改めました。襄子の姉は代国の王の夫人になっていましたが、襄子は代王を国境にある山での宴会に誘いました。そして乾杯を合図に、給仕が鉄のひしゃくで代王の頭をかちわって殺し、趙は代を滅ぼして中原へ進出する足場をえました。弟に夫を殺された代王夫人は、それを嘆き悲しみ、笄（かんざし）で自分を刺して死んでしまいました。代の人たちはその死を悼んで、その山に摩笄之山と名づけました。

この地域が南の農耕文化と北の遊牧文化の接点にあったことは歴史的に大きな意味をもっています。時代が下って西暦 936 年ごろ、漢民族の王朝・後唐を滅ぼして後晋を建てた石敬瑭が、そのときに遊牧系の遼から受けた援助の見返りに、燕雲十六州を遼に割譲しました。燕是北京のあたり、雲は大同のあたりで、蔚県を含む当時の蔚州もそのうちの 1 つでした。そして遼はこの地域を漢族の王朝と同じような制度で統治し、遊牧の社会とは区別して支配したとされています。蔚州博物館には遼代の彩色した墓とか、明代の道教の塑像などが展示されています。

◆繁栄を支えた山西商人

中国の古代の街はたいいてい真四角の城壁に囲まれ、碁盤目状につくられています。北京がそうですし、地方の都市もそのようにつくられています。

ところが蔚州古城は、それとは異なる独特の形状をしています。復元もかなり入っているでしょうが、城壁がいまもあります。この城壁について民間の伝承があります。役人が城壁を建てても、すぐに崩れてしまう。ある雪の日、その役人が頭を悩ましていると、目の前をウサギが跳ね回る。その足跡をたどっていくと、街を取り囲むようになり、そのとおりに城壁を建てたところ、堅牢な城壁ができた。そのために方形ではなく、曲線をともなった城壁になったというわけです。

蔚県の旧跡のひとつに暖泉鎮の西古堡があります。小さな田舎町ですが、しっかりした城壁で囲まれているために堡と呼ばれます。明と清の時代に、西北の遊牧民族と対抗し、最前線くい止める防衛上の拠点でもありました。頑丈な門や古い町並みがいまでも残り、伝統的な風景として観光資源になって

います。この春に行ったときも多くの観光客で賑わっていました。舞台がたくさん残っているのも特徴で、演劇によって結束を固め、他方でここが防衛の場所としても使われたのか、舞台が非常に堅牢に造られています。

このような城壁や舞台を造るためには莫大な資金が必要ですが、それをまかなったのが、明・清代に活躍した山西商人です。

蔚県はいま河北省に属しますが、山西省に属していた期間が長く、山西商人の拠点として繁栄していたのです。繁栄の理由として、さまざまな文化の交差点であったことがあげられます。北西に遊牧系の文化があり、南東に農耕文化の漢民族の領域があります。遊牧系のモンゴル族などがつくった物品やヒツジなどを南の農耕地域に運び、農耕地域でつくられた日用品などを北へ供給する。平時時には人と物の行き来が盛んにおこなわれ、緊張が高まるどころが軍事の要衝になる。明代は遊牧系の勢力が強く、明が防衛に回りました。大同から蔚県の全域にかけて明の前線地区だったのです。山西商人はそこに軍事物資、食糧、衣服などを供給しましたが、政府からお金をもらわず、塩を専売する権利を得ました。それを利用して利益を上げては資金をつくる。

清になると、支配者の満州族とモンゴル族は親戚のようなもので、皇帝の夫人はたいいていモンゴル族ですし、モンゴルの有力者は清朝の要職に就き、遊牧地区と農耕地区とが盛んに交易をおこないました。山西商人はモンゴル族にも満州族にも人脈をもち、政府に

金を貸して清朝政府を支えると同時に、金融的な支配を強めて繁栄を極めました。蔚県の多くの村に神様を祀る廟があり、さまざまな壁画が残っています。そのなかには清代のさまざまな職業を丹念に描いたものがあり（百工図）、そのレプリカが先ほどの博物館に展示してあり、たいへん興味深いものです。

◆過去の繁栄を瞬間冷凍保存

当時の交易路の一つに飛狐峪（表紙写真参照）があり、隊商がここを行き来したと言われています。両側から切り立った崖が迫り、その谷底に昔からの道路があります。日中戦争にさいして日本軍がここを行進する古い写真も蔚県のどこかに展示されていました。

ところが 1909 年に北京と張家口を結ぶ鉄道ができ、1914 年にモンゴルのフフホト（呼和浩特）まで延伸されました。農耕地域の中心から遊牧地区の中心まで直接鉄道が走るようになったのです。張家口はもともと遊牧系の地域と農耕地域との結節点で、地名に口がついているように交易の出入り口であったのですが、鉄道が開通したことによってここが主要ルートになり、そこから外れた蔚県は寂れてしまったのです。

逆に、このことが地域の今の状況を作っています。非常に繁栄していたところが、鉄道一本のために一気に衰退しました。瞬間冷凍保存です。古い繁栄の跡がそのまま残り、非常に豊富な史跡群を今に残す結果になったわけです。このパターンは日本でもほかの国でもたくさんあって、かつて繁栄していたところが交通や経済事情の変化で一気に寂れることで、世界遺産になっ

たり、町並み保存や史跡群として脚光を浴びたりしています。蔚県では地域の人も、地域の文化的な資産、史跡群がこの地域の魅力であることを強く自覚して、それらをうまく活かしながら地域の活性化、観光につなげ、地域の魅力を発信しています。

蔚県がほこる文化の一つに剪纸（切り絵）があります。私も工房を見学しましたが、代々切り絵を受け継いできた家があるわけです。はさみで切るのではなく、メスのような細い刀で何枚も重ねた紙を切り、とても手の込んだ芸術性の高い切り絵をつくっています。それから残念ながら 4 月のツアーはみることができなかったのですが、高熱で溶かした鉄を城壁にぶつけて花火のように楽しむ打樹花があります。

◆村にも緑化の歴史があった！

緑化に取り組むのは蔚県柏樹郷の永寧寨村です。蔚県は中央部が東西に長い盆地で、北は黄土の丘陵地、南は山地になっていますが、永寧寨村は中央の盆地と南の山地の境界にあります。山の斜面にマツを植えますが、地元ではここを観光の拠点にしたいと考えています。最近是中国でも農村に泊まって自然に親しむ新しい観光がブームになっています。ここは北京に近く、いろいろな史跡が残っていますので、農家に滞在しながら、さまざまな果樹を摘み取ったりしてもらおうというのです。

南斜面はあまり草木が生えていませんが、北斜面は以前に植えられたものが育っています。この地域は乾燥しているので、日が当たって乾燥しやすい南斜面はあまり草木が育たず、冬に降った雪が春先まで残っている北斜面のほうで植生がわりと再生しやすいのです。

永寧寨村を散策しましたが、村のはずれに小さな廟がありました。小さいけれどしっかりした建物で、おそらく関帝廟だと思います。この廟の壁面に五十数センチほどの石碑がはめ込まれ

大 清 道 光 二 十 六 年 四 月 穀 旦 立	石 工 委 盛 印	徐 秉 金 武 生 李 鑑 三	徐 秉 合 李 善 海 徐 文 官	張 仕 李 彩	經 領 人 李 彩	李 明 張 文 魁	栽 樹 費 用 大 錢 參 万 參 千 文 整 蔚 郷 增 広 生 員 李 化 成 書	世 千 不 朽 云	所 考 証 爰 贅 數 語 以 勒 諸 石 以 垂 後	也 特 經 營 所 始 費 用 所 出 恐 後 人 無	以 培 風 俗 亦 所 以 需 後 世 棟 梁 之 用	矣 于 是 東 堡 公 勤 裁 植 松 樹 一 坡 所	堡 一 村 之 地 而 荒 敗 草 盡 為 廢 地	寨 東 堡 村 南 原 有 景 坡 一 座 本 係 東	其 流 泉 公 不 敢 憚 其 勞 樹 之 榛 栗	風 俗 必 要 以 樹 木 所 以 相 其 陰 陽 觀	竊 思 風 俗 所 関 端 在 于 山 水 而 培 植
---	-------------------------------	--	---	--------------------------	-------------------------------	-------------------------------	--	-----------------------	--	--	--	--	---	--	---	--	--

永寧寨村の廟にある碑文の内容（口は解読不能）

ていました。碑文の内容は、この地域の風俗は山などが培っていくもので、社会的な様々な人のあり方も、人間だけではなく、周辺の自然環境が大きく影響すると、陰陽の考え方から説明をしています。この地が荒れてしまったので、もう一度木を植えて、風俗を培っていこう。祖先たちはハシバミとかクリとかを植えた。周辺の山々の環境をよりよくすることで村の雰囲気をもっとよいものにしていこう。そのためにマツの木を斜面に植えようと思う。後代の人がその根拠を忘れることを恐れて、根拠を残そうとこの石碑を刻む。この樹木を植えるための費用として大錢一たぶん銀貨一三万三千文を整えた、と

書かれています。村の人たち、石を刻んだ人の名前もあります。大清の道光26年、1846年に彫られたもので、アヘン戦争が終わってしばらくのころです。名があがっているのは、ハシバミ、クリ、イイギリ、キリ、キササゲ、ウルシといった樹木です。
先ほど紹介した飛狐峪に行ったとき、山の斜面に自然に植生が戻っているところがありました。先ほどの碑文とまさに対応して、ハシバミなどの落葉広葉樹を中心とした樹木が生えています。この地域では落葉広葉樹が生えているのが本来あるべき姿だと、この碑文を作った人たちもしっかり理解していました。

私たちが緑化する場合にも、この碑文をもう一度読み込んで、どういう樹木を植え、どういう森にしていくなか、一緒に考えていく。私たちの押し付けではなく、地元の祖先たちも同じことを考えていたんだと、この碑文をひとつの根拠にしていくなか、また、南天門自然植物園等と一緒にいって、この地域のあるべき植生はこういうものであり、このような樹木が生えていると森は安定し、鳥が寄ってきて、さまざまな動物も増えてくる。自然の中での村の生活も、精神的により豊かにしていく可能性が開けるのではないかと、そんなことを話し合っていけるといいのではないかと思います。



- 11年前イオンの植樹ツアーに参加させていただいたときは大変お世話になりました。苦しい思い出でしたが、今では私の大切な思い出です。
私の植えた木が風になびく姿を夢見つつ、みなさまがたのご健康とご活躍をお祈りしております。(K.H)
- GEN25年の歴史に喝采。筆舌に尽くしがたいご苦労があったと思います。あらためて高見副代表らみなさまの努力にカンバイ。一方会員も歳を取ってきました。(M.Y)
- 新しい植林地ができて本当によかったです。緑豊かな中国を目指して一人でも協力してくださる方が増えればと願っています。(H.K)
- 十数年前、ツアーに参加させていただき、そのとき見た大同が緑豊かになっていることに感激無量です。わたしも一度だけですが参加できたこと、いい思い出です。(S.Y)
- 根・幹・葉の大切さを百姓していると感じます。ひとつでも欠けるとダメですね。根の交流・外交を継続・発展させてください。(N.H)
- 日中間の環境問題の協力はとても重

要な事業で、そのなかでこの会の果たす役割も大きいと思います。会の発展を期待しています。(S.S)
○緑の地球ネットワークが、大自然に対して真摯に向き合ってきた結果、今日の高い評価につながっているのだと思います。私自身、大同を訪れてからすでに10年以上経過しておりますが、これからも活動に関心をもち続け、この価値観を共有でき

る若い仲間をさらに増やすことができるよう、私なりに協力させていただきたいと思っています。(E.M)
○たいへん難しい環境のなか、事業の継続と発展にむけたご努力は並大抵ではないものと拝察します。困難をプラスの力に変えることができるのも、初志を忘れることなく、こつこつと積み上げてきた各方面との協力と信頼があって(8ページにつづく)

参加者募集

GEN 自然と親しむ会 前中代表と歩く「野の道」シリーズ④ 京都市洛西竹林公園を歩く

前中代表と歩く「野の道」シリーズ、第4弾は京都市洛西竹林公園を歩きます。各地から採集した「生態園」や、竹の伝統工芸・歴史・文化を説明する「資料館」などを訪れます。暑さもひと段落するころ、竹林を歩いてみませんか。
○日程：9月30日(土)10時～14時ごろ
○場所：京都市洛西竹林公園
○集合：10時に阪急京都線「桂」駅。駅からバスで竹林公園まで移動します。
○案内：前中久行さん(GEN代表、

元大阪府立大学大学院教授)
○持ち物：歩きやすい服装・靴、弁当、飲み物、帽子、敷物、雨具
○参加費：500円(保険料を含む)
○定員：20名程度(先着順)
○申込み：9月27日(水)までにGENまでお名前、連絡先、生年月日をお知らせください。GENのホームページからも申込みます。詳細はGENホームページのイベント情報欄をご覧ください。<http://gen-tree.org/event/index.html>
※小雨決行



大同緑化協力 25 年の軌跡 大同の気候

GENの山西省大同市での25年の緑化協力を振り返り、当時の写真も交えてシリーズでご紹介します。今回で3回目です。(高見邦雄)



視界を遮るほど吹き荒れる大同の春の風砂

大同市陽高県にこのような民謡があります。「靠着山呀，没柴烧，十箇年頭，九年早一年涝…」(山は近くにあるけれど、煮炊きに使う柴はなし。十の年を重ねれば九年は早で一年は大水…)。大同の農村に25年間、通いつづけた私の実感でもあります。

今回は後半だけをみてみます。とにかく雨が少ないのです。たまに650mmほどになることがあり、たとえば1995年がそうで、この年は8月末から10月まで降りつづき、土づくりの窖洞に雨水がしみこんで、たくさんの住居が倒壊しました。6万世帯、24万人が被災したという報道もありました。これが十年に一度の大水です。

その逆に雨の少ない年は250mmとか200mmに落ち込みます。西暦の奇数年はたいがい旱魃で、雨に泣かされた1995



95年の水害で崩壊したヤオトン

年も7月下旬までは雨がなかったのです。そして1999年が大旱魃で、高所の村を中心に蒔いた種さえも収穫できず、建国以来最悪の旱魃と呼ばれていました。中華人民共和国の成立から50年の年ですから、50年に一度の旱魃といってもいいでしょう。

その2年後、2001年がそれに輪をかけて大旱魃で、8月上旬、北京に向かう列車の窓からみる山々は茶色のままでした。もともと乾燥に強い植物しか存在しないのですが、それすら枯れてしまったのです。このときは100年に一度の旱魃と呼ばれていました。十年のうち九年は旱といっても、50年に一度、100年に一度の旱魃がきびすを接してやってきたのではたまりません。

ところが、です。私の印象ではそのころを最後に深刻な旱魃がないのです。雨が少ないのは同じですが、農業に大打撃をあたえるほどの旱魃になっていません。なにかが新しくでてくれば印象に残りますが、なにかがなくなったことには気づきにくいものです。私の印象・記憶にまちがいがいないか、大同事務所に尋ねてみました。答えは、旱魃はあるけれども、以前ほど嚴重ではないというもの。

それからもう一つ。春先の風砂です。午後、気温が上がると、あちこちで旋風が起こり、小さな竜巻のように渦を巻いて土が舞い上がるのがみられました。また前方から茶色の風がやってくると、あわててそれに背をむけてしゃがみこみ、目と口をしっかりとつぐんだものです。

見た目にはそれらは激しいのですが、より本格的な風砂は西域からの大量の土が偏西風に乗って高いところを東へ東へと運ばれていくものでした。まっ昼間にもかかわらず、太陽が遮られて夕暮れのように暗くなり、一陣のそれがすぎると、白茶けた太陽がうっすらと顔を出す。そんなことがよくあったものです。これも先ほどの大旱魃のころがピークだったと思います。

そして、それ以後、私の記憶からぶつりと消えてしまいました。大同の人たちに問い合わせると、2003年以降は明らかに少なくなり、今年も小さなものが一度きただけだといいます。日本では、黄砂がどんどんひどくなっているという報道があるのですが、その途中の大同でも北京でも、その逆に「以前はひどかったけど、いまは少なくなった」という人が圧倒的に多いのです。

私たちの緑化協力が、初期は失敗つづきだったのに、後に成果があがるようになったことには、このような気候の後押しもあったのだと思います。



干ばつで背丈の半分しか育たないトウモロコシ



タイ山岳民族の オーガニックコーヒー

おいしいコーヒーを飲んでタイ山岳少数民族の自立に協力しませんか。

写真集「中国黄土高原－砂漠化する大地と人びと」でおなじみのカメラマン橋本紘二さんが、タイ北部の国籍を持たない少数民族、ラフ族の村の農耕や暮らしを撮影し、1998年に写真集「クリヤーの山・タイ山岳少数民族の暮らし」を発刊しました。

そのタイの山村ホイナムクン・バン・マイで、2011年より焼畑農地を森に返すプロジェクトをおこなっています。森にコーヒーの木を植えて育て、販売しています。豆は熟した実だけを手で摘み、天日でゆっくり乾燥させ、手で選別して出荷しています。化学肥料は使わないオーガニックコーヒーです。タイから生豆で輸入し、日本で焙煎した豆をお送りします。

◎コーヒー焙煎豆 1袋 200g 1,000円
(送料が別途かかります)

○ご注文・問合せ：お名前、ご住所、注文数を下記までご連絡ください。タイ山岳民族を支援する会 橋本紘二 (〒942-1401 新潟県十日町市松之山水梨 1914 tel./fax. 025-596-3514)

京都御苑 夏の自然教室

京都御苑でおこなわれる自然教室のご案内です。自然観察をとおして夏の京都御苑にふれてみましょう。

○日時：7月23日(日) 9時30分～12時(受付は9時～9時20分)

※小雨決行。当日7時時点で気象庁が大雨、暴風警報を発令した場合は中止。

○集合場所：京都御苑内「乾御門」(地下鉄烏丸線「今出川駅」3番出口から徒歩3分、市バス「烏丸今出川」から徒歩3分)

○講師：京都自然観察学習会に属する植物、野鳥、昆虫、きのこの専門家

○参加費：100円(保険料として)

○その他：服装は長袖、長ズボン、運動靴。ハチを刺激する恐れがある黒色系は避けてください。双眼鏡、ルーペなどの観察用具があると便利です。動植物の採集はできません。網や虫かごは持参しないでください。ペットを連れての参加はご遠慮ください。

○問合せ：一般財団法人国民公園協会 京都御苑 (〒602-0881 京都市上京区京都御苑3 tel. 075-211-6364 fax. 075-211-6365 e-mail: info-kyoto@fng.or.jp URL <http://fng.or.jp/kyoto/>)

(6ページからつづく)こそかと思えます。今後しばらくの日中関係において、GENにしかできない貢献というものがまだまだあるはずですので、新しい土地での活躍に期待しております。(M.R)

○新しいプロジェクトの報告に目を通して感じるのは若々しさと元気のよさです。プロジェクトのやりかたや、現地のパートナーの発想や実行力が既成概念や従来のやり方にとられない「今」の活動だなという感想をもっています。立ち位置を変える、新しいとびらを開ける、考えることも大事だけれどやってみることはもっと大事なんですね。会員のひとりとして、新しいプロジェクトのスタートを支持しますし、始まったことがひとつの大きな成果だと思います。(M.R)

○大学生だったわたしも齢四十になり、会報を拝読し現地事業の進展と時の経過を実感いたします。仕事に時間に追われる日々ですが、昨年あたりから働き方への世の中の変化もあり、今後の生き方を見つめ直したいと思う日々です。GENのますますの発展・事業の継続を、陰ながらではございますが、応援しております。(N.K)